研究ノート

前漢文帝覇陵と江村大墓―その後―

西　川　利　文

〔抄　録〕

近年の発掘成果によると、前漢文帝の覇陵は、従来いわれていた鳳凰嘴ではなく、白鹿原上で発見された江村大墓だと考えられるようになり、江村大墓は2021年の「全国十大考古新発現」の一つに認定された。それに合わせて、発掘報告等、江村大墓に関する調査報告および論考が発表された。筆者は以前（2020年）に、当時刊行された発掘概要を参照しつつ、江村大墓に関する分析を行った。今回は、新たに発表された発掘報告等を参照しながら、新たに判明した点を中心に、前稿で不明確だった点を補うことにした。その結果、江村大墓が真の文帝覇陵の蓋然性が高まったことを確認するとともに、なお残された問題として覇陵邑の位置があることを指摘した。

キーワード　前漢皇帝陵、文帝覇陵、江村大墓、陵邑、白鹿原

はじめに

2021年12月、中国国家文物局は江村大墓が前漢文帝の覇陵であると発表し、同墓は2021年の「全国十大考古新発現」の一つに認定された。それにともなって、『考古与文物』2022年３期に、発掘簡報と、発掘責任者の一人である馬永嬴氏による江村大墓が文帝覇陵であることを論証する論考が掲載された(1)。さらに『2021中国重要考古発現』(2)および『考古中国重大項目（2021）』(3)に発掘概要が掲載された。

ところで筆者は前に、2017～18年の江村大墓に関する発掘概要(4)をもとに、現地を訪れた際の現地での説明、さらに発掘概要が発表される以前に出た江村大墓が真の前漢文帝覇陵だとする論考(5)を参照して、江村大墓が真の前漢文帝覇陵の可能性が高いことを報告した(6)。ただそこでは情報が限られており、今回の発掘簡報等によって、江村大墓およびその周辺を含んだ覇陵陵区の状況が詳細に判明するようになった。そこで本稿では、新たな情報をもとに江村大墓が覇陵とみて間違いないことと、それでもなお残されていると考えられる点を指摘したい。

1．明らかになった事実

まず覇陵陵区とは、従来から文帝覇陵とされる鳳凰嘴、竇皇后陵、薄太后の南陵、そして江村大墓を含む白鹿原上の遺跡区域である。この区域は、以前から漢代関係の遺跡が発掘されていたが、2006～2009年の調査によって江村大墓の存在が確認された。

そして2011～2013年の調査によって江村大墓の墓葬規模が明らかになった。それは、墳丘はないが四方に墓道を備えた一辺250mほどある亜字形の墓葬で、東側の墓道がもっと大きく長さ135m、幅10～40mあり、地表から30m下に一辺約73m四方の墓室がある。これは、大規模な墓葬であることは間違いない。

江村大墓の存在が明らかになって以降、陵区での盗掘が相次ぎ、2017年に陝西省考古研究院と西安市文物保護考古研究院が漢陵考古隊を結成し、江村大墓および南陵の盗掘にあった外蔵坑に対して緊急発掘を行った。この成果が、2022年に刊行された発掘簡報や発掘概要である。これらの内容を参考にしつつ、一連の発掘調査によって明らかになった点を以下に紹介しよう。

(1) 鳳凰嘴

まず、一般に前漢文帝覇陵と考えられている鳳凰嘴についてである。ここは、西安東方の白鹿原という台地状の東北端に位置する。その麓には、清朝乾隆期に西安近辺に存在する皇帝陵を確定して歩いた畢沅による石碑が立っており、そこから見ると墳丘のようにも見える。しかし漢陵考古隊が行った調査によると、頂上部も斜面も自然の堆積で、陵墓など人工的に作られた構造物の形跡はなかったという。この点は前稿でも簡単に触れたが、今回の発掘簡報には鳳凰嘴の頂上部と斜面の堆積状況が図示されており（図三・図四）、鳳凰嘴が陵墓でないことが確実となった。

それでは、鳳凰嘴が文帝覇陵だと認識されるようになったのは、いつ頃なのか。これを馬永嬴氏は歴代の文献の記載から分析し、金末から元代（1223年頃～1300年頃）にかけての人である駱天驤の編纂した『類編長安志』からだという。

『史記』『漢書』の袁盎伝には、文帝が覇陵から「峻阪」や「峻山」を下ろうとしたとの記載があり[(7)]、具体的な位置は示していないが、地勢的に高所が想定される記述は見える。その後、『水経注』をはじめとする地理書には、覇陵が白鹿原の上にあることを示す記事が南宋の時代まで続く。そのうち、駱天驤が参考にした『長安志』（北宋時代）にも覇陵は「白鹿原の上に在り」とあるにもかかわらず、『類編長安志』は「白鹿原の北の鳳凰嘴に在り」とした。

馬氏は、この『類編長安志』は誤りが多く信用できないとする。しかし馬氏の指摘の通りだとすれば、『類編長安志』が文帝覇陵＝鳳凰嘴説を普及させるきっかけとなったのであり、この著作が刊行される13世紀以降、次第に鳳凰嘴＝文帝覇陵の考え方が定着していったことになる。

ただ鳳凰嘴という具体的な位置を示してはいないが、文帝霸陵が自然の山を使って造営されたとする指摘は古くからある。その一つは、『漢書』巻４文帝紀・賛で班固が「治霸陵、皆以瓦器、不得以金銀銅錫為飾、因其山、不治墳（霸陵を治めるに、皆な瓦器を以てし、金銀銅錫を以て飾と為すを得ず、其の山に因り、墳を治めず）」とする記載である。これは『史記』巻10孝文本紀の後６年（前158）条にある「治霸陵、皆以瓦器、不得以金銀銅錫為飾、不治墳、欲為省、毋煩民（霸陵を治めるに、皆な瓦器を以てし、金銀銅錫を以て飾と為すを得ず、墳を治めず、省と為し、民を煩わすこと毋らんと欲す）」の記載の「不治墳」の前に「因其山」を加えたものである。もう一つは、同じく『漢書』文帝紀の後７年（前157）の文帝遺詔の「霸陵山川因其故、無有所改（霸陵山川は其の故に因り、改める所有る無し）」の箇所に付された応劭の「因山為蔵、不復起墳、山下川流不遏絶也。就其水名以為陵号（山に因り蔵と為し、復た墳を起さず、山下の川流は遏絶せざるなり）」とする注である。

ちなみに前漢末の劉向は「孝文寤焉、遂薄葬、不起山墳（孝文焉を寤り、遂に薄葬し、山墳を起さず）」（『漢書』巻36楚元王伝）といっているが、この「山墳」とは墳丘を指すと考えられる。班固はこの「山墳」を、山を利用した陵墓と考え、「因其山」の文を加えたのかもしれない。そして応劭は、班固の賛の文を参照して「山を利用して墓室を作った」と考えたのだろう。班固は後漢初期、応劭は後漢末の人であり、後漢時代には前漢時代とは異なった文帝霸陵のイメージができていたと考えられる。この山を利用した陵墓という観念が、『類編長安志』に至って山を「鳳凰嘴」という具体的名称となったと考えられないだろうか。とすれば、鳳凰嘴＝文帝霸陵の「定説」を作り出した責任のすべてを『類編長安志』に帰すことはできないだろう。

(2) 江村大墓

それでは次に、江村大墓がなぜ真の文帝の陵墓と考えられるかを、新たに判明した情報もくわえつつ確認しよう。

江村大墓は、鳳凰嘴の南2100mのところにあり、竇皇后陵から見ると西800mのところにある。この距離の近さといい、前述した墓葬の規模といい、竇皇后陵との親近性を示唆する。一般に前漢の皇帝陵と皇后陵は、「同塋異穴」の関係、すなわち墓室は異にするが埋葬施設は共有するという関係にあるという。この原則でいえば、鳳凰嘴と竇皇后陵よりも、江村大墓と竇皇后陵との関係の方がふさわしいといえる。

これを裏付けるように、江村大墓と竇皇后陵を取り囲む外壁（外園牆）の存在が明らかになった。復元できるのは北側・南側・東側のもので、東西1206m（北側・南側）、南北863m（東側）となり、西側の壁は確認できていない。そして東北角の北壁と東壁は、竇皇后陵の周囲を巡る陵園壁と一部共有している。外壁が江村大墓と竇皇后陵を囲む形になっていることによって、両墓が「同塋異穴」の関係にあることが判明する。とすれば、東側の陵墓が竇皇后陵

なのであれば、西側に存在する江村大墓は文帝の陵墓、すなわち霸陵だと考えるのが妥当であろう。

外壁に囲まれた内部の状況をもう少し確認しておこう（発掘簡報の図六参照）。内側には、３つの建築遺跡（１号・２号・４号）があり、さらに江村大墓と竇皇后陵の間には、14列22座にわたる大規模な外蔵坑が存在する。この構造は、景帝陽陵との共通性を指摘できるだろう。

全体的な構造はある程度判明したので、次に江村大墓の構造について確認しよう。以前にはあまり明確に言及できなかったが、江村大墓の周囲には、壁の代わりに取り巻く「石囲界」という石敷きがあることである。現在残る規模は、南北396m、東西393m、幅1.3～1.5m で、大きめの丸みを帯びた石（河卵石）が敷き詰められている。同じような石敷きは、南陵の周囲にもあるという[8]。「石囲界」が陵園壁と同様の機能をなすものと見て間違いない。

さらに今回明らかになった点として、江村大墓を取り囲む「石囲界」の各辺に、「石囲界」から若干外側に門闕が設置されていることである。四つのうち比較的保存状態が良いものとして、東側と北側の門闕がある。東側は、全長88.9m、幅6.3～16.5m、中間に幅1.5の門道がある。北側は、全長88m、幅9.3～16.1m、中間に幅1.9m の門道がある。これは、景帝陽陵や宣帝杜陵に存在する門闕と同じ機能を持つと考えられる。

「石囲界」内側の江村大墓本体の周囲には、114座の外蔵坑が取り巻いている。そのうちの74座が東西南北に放射状にあり、その他に西南角に35座、墓道北側に５座の比較的小規模の外蔵坑がある（東24座、南17座、西53座、北20座）、最長92.3m、最短３m で、幅１～10.4m、深さ5.3～10.5m である。このうち８座の外蔵坑が発掘され、多数の副葬品が出土している。これも景帝陽陵をはじめとする皇帝陵の外蔵坑と遜色はない。

その114座の外蔵坑に囲まれた中心に、約73m 四方の墓室が存在することになるが、亜字形の墓葬といい、大規模な墓室といい、江村大墓が皇帝陵として遜色のない規模だといえる。まさに文帝霸陵は、「不治墳」とか「不起山墳」といわれる、墳丘を持たない陵墓だったのである[9]。

(3) 竇皇后陵

今回の発掘簡報には、竇皇后陵の発掘成果にも触れている。それによると、陵墓を取り巻く壁は、前述のように北側と東側が外周の壁と共有しており、西側には332m、南側には313m が復元できる壁があり、東側を除く３箇所に門闕が設けられている。いずれの門闕も江村大墓のものより若干小規模である（南門：長さ75m、幅6.8～17.2m。西門：長さ61m、幅6.8m。北門：長さ75m、幅6.2～17.2m）が、北門は東側に建築物（３号遺跡）が連結しているのが特徴的である。この建物がどのような性格のものか不明であるが、外壁内に存在する他の３つの建物（１号・２号・４号）も含めて、今後の詳しい発掘報告が待たれる。

竇皇后陵本体は、底部が東西153m、南北137m、頂部が東西35m、南北30m、高さ28m で、

若干東西に長い覆斗形をしている。墓室の規模は不明だが、各辺に一つずつ墓道があり、江村大墓と同じく東側の墓道が最も長く、亜字形の墓葬である。外蔵坑も存在するが、江村大墓のように墓域を取り囲むように配置されておらず、不規則に13座存在する（発掘簡報・図一〇参照）。

以上のように、竇皇后陵本体および周辺の状況も次第に明らかになりつつある。特に、江村大墓と外壁によって一体となっていることは、二つの墓葬が密接不可分であることを物語る。外壁内にある建築遺跡（１号・２号・４号）および竇皇后陵の北側門闕と接続する３号建築遺跡の発掘が進んで、それぞれの建築物の性格が判明すれば、より一層二つの墓葬の関係性も明らかになるだろう。

(4) 南陵および外壁周辺の遺跡

外壁の南側および外壁が見つかっていない西側には、外蔵坑や陶窯が点在している。そしてさらに西側には、江村大墓から西北に3000m 離れた馬家溝漢墓や西南に3900m 離れた栗家村漢墓が存在している（発掘簡報の図五および図一一参照）。これら漢墓群が外壁の中に納まることはないだろうが、これらが陪葬墓だとすれば、陵区は西側に延びていることになるのだろう。

最後に、江村大墓から南に2000m 離れたところにある、薄太后の南陵について触れておこう。この陵墓については、発掘概要の「陝西省西安市江村大墓」に詳しく記されている。

墳丘は南北に長い覆斗形をしており、底部は東西140m、南北173m、頂部は東西40m、南北55m、墳丘の高さは25m である[(10)]。墓葬空間は、墳丘よりも東に若干ずれており、四方に墓道のある亜字形を呈し、東側の墓道が最も大きく長さ148m、幅11～52m ある。そして墓室は一辺75m あり、墓葬の規模は江村大墓よりもやや大きい。また墳丘の周囲には江村大墓と同様の幅２m の「石囲界」があり、一辺の長さ600m である。

墳丘の周辺には20余座の外蔵坑があり、さらに墳丘の西北200m の「石囲界」の内側に380座を超える小型の外蔵坑が存在することが判明した。さらに墳丘の北側（１号）と東側（２号）の建築遺跡が見つかっている[(11)]。

以上から見ると、南陵も皇后陵に匹敵するような大規模な墓葬だったことが判明する。

２．なお残された問題

以上のように、江村大墓と竇皇后陵は外壁で囲まれた墓葬空間で一体性が明らかであり、江村大墓が文帝霸陵であることは、ほぼ確実であろう。そうすると、竇皇后陵とともに文帝霸陵も白鹿原の上に存在することになり、霸陵に付属する陵邑の位置が問題となると考える。

周知のように、元帝以前の前漢皇帝陵には、陵邑が設定された。当然、文帝霸陵にも陵邑が

存在するが、文献の記載によれば、芷陽（郷）を文帝の９年（前171）に霸陵としたといわれる[12]。近年も、その位置を巡る論考が出ているように[13]、正確な位置はまだ確定していないようである。ただこれまでの研究では、芷陽の位置から霸陵邑を確定しようとしており、その結果、その位置は白鹿原の麓にある灞水の東側、すなわち霸陵区と臨潼区の境界あたりに比定されているようである[14]。鳳凰嘴が文帝霸陵だとすれば、その麓に当たる位置でも問題はなさそうであるが、江村大墓が文帝霸陵だとすれば、やはり白鹿原の上にあってしかるべきなのではないだろうか。

確かに、芷陽の存在を示す「芷」を記した文字資料が見つかっており、芷陽＝霸陵邑の前提に立てば、そこが霸陵邑と考えられるのだろう。しかしあえて言えば、そこからは霸陵邑の存在を示すような文字資料は発見されていないようである。

『西漢帝陵鉆探調査報告』[15]によって、皇帝陵と陵邑との関係を見れば、高祖の長陵や恵帝の安陵では、陵邑は陵墓の外壁と近接している一方、景帝の陽陵以降は、陵邑が陵墓から離れる傾向があるように見える。霸陵邑はその分岐点にあたるようである。離れているとすれば、芷陽に比定される場所でもよさそうであるが、やはり白鹿原の下にあるのが気になる。

一方、陵墓と近接しているとすれば、南に南陵があり、そこにも南陵県があるから、南に霸陵邑を想定するには無理があろう。残るは北側であるが、そこは白鹿原の北の端に近く、大規模な陵邑が設定できるか、若干不安である。結局、合理的な位置を確定することは、現時点では不可能である。

これまでの霸陵陵区の調査は、江村大墓を中心とする墓葬の調査が中心だったようである。これは方向性として間違いではないが、今後は陵邑の位置の確定作業も作業日程に入れば、より詳細に文帝霸陵とその周辺施設の実態が明らかになるだろう。

おわりに

本稿は、以前に行った限定的な情報をもとにした報告に、新たに判明した情報を参照しながら補足を加えようとしたものである。その結果、以前には不明であった江村大墓と竇皇后陵を囲む外壁の存在が明らかになったことによって、両墓の一体性が判明した。これによって、江村大墓が真の文帝霸陵である可能性が高くなった。文帝霸陵まさに、「墳を治めず」とか「山墳を起さず」といわれる、前漢時代唯一の墳丘を持たない皇帝陵だったと考えられるのである。

今後、さらに調査が進み、外壁内に存在する建築物の性格等が判明すれば、墓葬空間としての霸陵陵園の実態が明らかになろう。さらに、その存在が不明確な霸陵邑が、いったいどこにあったのかが明確になれば、その陵邑の在り様が、高祖や恵帝といった前代の皇帝陵の陵邑に近いのか、それとも景帝以降の陵邑の先駆けをなしていたのかが明らかになろう。

文帝霸陵は、興味の尽きない皇帝陵である。

〔注〕

（１）陝西省考古研究院・西安市文物保護考古研究院（馬永嬴・張翔宇・曹龍・朱晨露・朱連華執筆）「漢文帝覇陵考古調査勘探簡報」、馬永嬴「漢文帝覇陵位置考」『考古与文物』2022-3、2022年

（２）馬永嬴・曹龍・朱晨露・張婉婉執筆「西安漢文帝覇陵　考古勘探与発掘収穫」国家文物局主編『2021中国重要考古発現』文物出版社、2022年

（３）陝西省考古研究院・西安市文物保護考古研究院（馬永嬴・曹龍・朱晨露・朱連華・張婉婉執筆）「陝西省西安市江村大墓」国家文物局主編『考古中国重大項目（2021）』文物出版社、2022年

（４）馬永嬴・張翔宇・曹龍・朱連華執筆「西安西漢覇陵遺址2017～2018年発掘収穫」『2018　中国重要考古発現』文物出版社、2019年

（５）楊武站・曹龍「漢覇陵帝陵的墓相形制探討」『考古』2015-8、2015年

（６）拙稿「前漢文帝覇陵と江村大墓」『鷹陵史学』46、2020年

（７）『史記』巻101袁盎伝「文帝從霸陵上、欲西馳下峻阪。袁盎騎、並車擥轡。上曰、將軍怯邪。盎曰、臣聞千金之子坐不垂堂、百金之子不騎衡、聖主不乗危而徼幸。今陛下騁六騑、馳下峻山、如有馬驚車敗、陛下縱自輕、柰高廟・太后何。上乃止。」および『漢書』巻49袁盎伝「上從霸陵上、欲西馳下峻阪、盎搤轡。上曰、將軍怯邪。盎言曰、臣聞千金之子不垂堂、百金之子不騎衡、聖主不乗危、不徼幸。今陛下騁六飛、馳不測山、有如馬驚車敗、陛下縱自輕、柰高廟・太后何。上乃止。」

（８）注（３）「陝西省西安市江村大墓」

（９）この点に関する最近の論考として、鶴間和幸「始皇帝の遺詔と薄葬の系譜――文帝劉恒・劉向・曹操・曹丕――」『汲古』83、2023年がある。

（10）この点については、劉慶柱・李毓芳著、来村多加史訳『前漢皇帝陵の研究』学生社、1991年も参照

（11）注（３）「陝西省西安市江村大墓」の「南陵陵園文物遺迹分布図」を参照

（12）『史記』巻22漢興以来将相名臣年表・文帝９年条「以芷陽郷為覇陵」とあり、『漢書』巻28地理志上・京兆尹の覇陵の項に「故芷陽、文帝更名」とある。

（13）鹿習健「芷陽・覇陵城（邑）与覇城関係再探」『西安文理学院学報（社会科学版）』21-2、2018年

（14）注（10）の『前漢皇帝陵の研究』参照

（15）咸陽市文物考古研究所編著『西漢帝陵鉆探調査報告』文物出版社、2010年

（にしかわ　としふみ　歴史学科）

2023年11月15日受理